

平成二十五年十二月

半世紀も前のこと、父の赴任地、米國の首都ワシントンにおいて初めて人種差別に遭遇せり。それ以前パリにて初めて黒人に接觸せし時は、幼きながら黒き人の存在を認識せり。されど、皮膚の色故の人種差別ありとは意識せざりけり。一九六十年代前半當時米國においては公民権運動眞つ盛りなるに未だ差別横行し、トイレに行くにさへ難儀す。Colored「有色」もしくは White「白」とを明示しあり、中學生なりし吾はアジア人にて白人にはあらずと思ひて、「有色」のトイレに行く。黒人に汝は白ければ白人用に行けと言はれ「白」に入るに、汝白からざればあちらなりと言はれ、小用もたせず右往左往せり。公民権法制定せられ、吾の通ひし白人の學校にも、黒人の子供たち入學しきたり。ただ、ワシントン市内には白人、黒人と明らか異なる居住場所ありて、吾が住居は白人の多き居住区域なればなほ、白人の學生大多數なり。その後私立の學校に轉校せるに、富裕層の子女のみ多く、目指す大學はアイビリーグ、送り迎へは高級車なり。黄色人種もある中に、日本人は吾一人なれども、イランやインドネシアの石油王の娘たちも在籍せり。但し黒人は一人たりともあらざりき。私立の學校においては公立に比すればさほど差別は感ぜざれども、白人至上主義のごときものは嫌と言ふほど味ふ。これは一個人の経験なるが、そは國のレベルに響かずんばあらざるべし。日米同盟などと我が國の政治家たち稱へつるも、彼果して我を眞のパートナーと覺えあるか疑問に思ふなり。